

学長告辞（平成 24 年度卒業式）

平成 24 年度に、晴れて学習院大学から巣立っていかれる皆さん、おめでとうございます。

本年度の卒業生、すなわち学士の学位を取得した諸君は、4 学部あわせて 1854 名、大学院の博士前期課程の修了者、すなわち修士の学位を取得した諸君は 115 名、後期課程を修了して博士論文が受理され、めでたく課程博士となられた諸君はあわせて 8 名、そして、法科大学院を修了して、新たに司法試験に挑戦する資格を手にした諸君は 32 名おられます。あらためて、おめでとう、と申し上げます。御父母をはじめ、ご家族の皆様も、さぞかしお慶びのことと思います。

ここに、学習院長、桜友会長はじめ、来賓各位のご臨席を賜るなかで、式典を無事に行なえますことを、こころよりうれしく思います。またこの式典には、卒業後 30 周年、40 周年、50 周年、そして 60 周年を迎えられた、今年度卒業なさる諸君から見れば大先輩にあたる卒業生代表の皆さんにも、ご列席いただいております。感謝申し上げます。

いまして、「式典を無事に行なえる」という表現を致しましたが、今年度卒業なさる諸君は、ちょうど 2 年ほど前、在学期間の真ん中あたりで、あの東日本大震災に遭遇しました。昨年、そして今年の卒業生のなかにも、ご自身が、あるいはご家族が、なんらかの形で被災された方がおられます。本当にたいへんであったと思います。そうしたなかで卒業に至ったことを、私としては、ことのほか称えたいと思っています。今でも、被災地の復興への道りが容易ではないという現実を、忘れてはなりません。

他方でまた、学習院大学の学生たちの中には、ボランティア活動に進んで取り組んでくれている諸君がいます。被災地に実際に訪ねて活動している諸君もいれば、別の形で活動している諸君もいます。被災地や日本のなかだけでなく、海外でのボランティアをはじめとした活動に、挑戦している諸君も少なからずいることを、たいへん嬉しく、頼もしく思っています。ここにおられる卒業生のなかにも、そうした取り組みへの参加を通じて、貴重な経験をいっぱい得ることのできた諸君がおられます。大学を足場とした、そのような自主的な活動は、今後とも、大学としてできるだけ支えてあげたい、と私は考えておりますが、卒業なさる皆さんご自身、大学を離れたあとにおいても、最初はたしかに身の回りのことだけでもたいへんだとは思いますが、さらに視野を広げて、できる範囲のことを忘れずに持続させる、あるいは、広く多様な事柄に貢献する気構えを持ち続けてくださると、たいへん嬉しく思います。それは、皆さんの周りの人たちのためでもありましようが、また、皆さんご自身のためでもあります。

と言いますのも、ここにおられる卒業生の諸君のうちの大多数は、4 月以降、就職して企業のなかで、あるいは自治体をはじめとした社会的な組織の中で、日々の勤務をしていくこととなります。小学校以来、あるいは幼稚園以来、皆さんがそのなかで生きてきた学校生活とは、根本的に異なる場でもって、時間を過ごすこととなります。しかし、学校生活

が終わったからといって、「学ぶ」、という行為が終わるわけではありません。たとえば、予期しなかったような事態に遭遇したときに、先輩がどういう対応をするかをとらえて、自分ならどうするか考えてみる。働く場において、だけではありません。こうした類の学びは、実に日々、いろいろな場面でありうるわけです。言い方を換えれば、自分自身で何かを学び取ってやろう、という気構えなしに、そういうアンテナを張らずして、なんとなくルーチンワークの中で毎日が過ぎていたのでは、なかなか自分自身を高めていくことはできない。従って、充実した人生を、自ら築いていくことも難しくなるでしょう。

しっかり目を見開いて、自ら現実と関わることです。学びという行為は、われわれ一人ひとりにとって、いわばエンドレスの、生きるということと密着したものに他なりません。ですから、われわれにとって生き方が唯一つではありえないように、学びの様式は一つではありません。正解はこれしかない、などというものではありません。言い換えれば、自らの学びの様式を、生きていく中で自ら身につけ、膨らませていく必要がある、ということです。

皆さんが過ごした、この学習院大学での学業や部活動や、あるいはボランティア活動、友達同士でのさまざまな経験、あるいはアルバイト経験もあったでしょう、それらの諸々を通して、皆さんご自身の中には、すでに、これからの人生を豊かにしていくための種は十分に育ってきていると思います。あとは、これからの人生において、皆さん自身が種から芽が出るように、そして大きな木に育っていくように、自ら努力してほしいと願います。

ご承知のように、日本は少子高齢社会に、急激に突入しつつあります。しかも、とりわけ大震災以後、これからの社会をどう築きあげていくのか、政治や経済をどのように、新たに組み立てていくべきなのか、自然との関わりをどのように受け継いでいけばよいのか、地域ごとの暮らしを、一人ひとりの生き方を、いかにして生き活きとさせることができるのか、根本からの考察が求められています。かつて19世紀後半に、欧米において産業化・近代化が進むなかで、フランスの画家ゴーギャンは、芸術家特有の鋭い感性から、現実のありようについて、こう自問しました。「われわれはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」と。いま皆さんは、どう考えるでしょうか。

実は、日本だけではありません。人類の世界全体が、いまこそ大きな変動の時代にある、といって差し支えないでしょう。世界における産業化の進展は、たしかに、いわゆる先進諸国に物質的な豊かさをもたらしました。われわれはそれを享受してきました。いま日本だけでなくアジア諸国も、そのあとに急速に続きつつあります。しかし他方、物質的な豊かさの背後で、環境への負荷は急増し続け、地球上の多様な生物がすでに消滅し、人類もまた貧富格差をはじめとした、さまざまな課題を抱え込んでいます。解決の方策も模索せずに、このままずるずるといってしまうとすると、どこで地球全体の文明が崩壊するかもしれない、そういう根源的な持続可能性が問われている時代です。

歴史上の、かつての文明の崩壊現象は、古代文明にしても、ローマや中国をはじめ各種

の帝国にしても、相当な広域に及ぶものではありましたが、しかしその影響は、まだ一定の範囲を超えるものではありませんでした。ところが、現在の課題の多くは、地球各地を多様な形であられ、巻き込まずにはおかない状況となっています。それほどまでに、地球各地の動きは連動性を高めている、グローバル化している、ということです。分かりやすい例で、たとえば大気汚染の問題にしても、水資源の問題にしてもそうですが、環境に関わる課題はもはや一国内だけに留まるものではなくなっています。気候変動だけではありません。人口変動の問題も、北半球では多くの国で少子高齢化が問題なのですが、地球規模で見たときには、飢餓の危険や食糧不足とリンクした複雑な課題となって、解決を求められています。

イギリスのロイヤル・ソサエティ、つまり英国学士院ですが、その会報をインターネット版で読むことができます。もちろん英語です。その生物学部門の学会講演論文が、今年の初めに出されていますが、講演したのはアメリカのスタンフォード大学の生物学者で環境学者でもあるポール・エリック先生です。そのテーマが「地球規模での文明の崩壊は回避できるであろうか」という深刻な問いでした。

皆さんの旅立ちを祝う式典で、これ以上、このたいへん重たい課題について論じることは避けますが、この老先生の最終的な結論は、平たく言えば、こういうことです。直近の経済的合理性、つまりコストの大きさとリターンの少なさだけにこだわるとすれば解決は難しい、しかし諸問題の連関性をとらえて、将来の世代の利益のためを考えることができれば、回避は可能だということです。そうです、皆が課題をしっかりとらえて、国際的に協調して力を合わせれば、文明の存続は可能だと。

私は生物学者ではありませんし、いつもこのようなサイトを検索しているわけではありません。このロイヤル・ソサエティのネット版の論文を私が知ったのは、じつは週一回自宅に国際郵便で送られてくる『ル・モンド』というフランスの新聞に掲載されていた記事を介してでした。

私が言いたいのは、このように情報の発信もグローバル化している中で、どうぞ皆さん、きっかけはあちこちに存在しています、視野を開いて、さまざまに発信されている情報から、考えるに値するものをキャッチする、意味あるものを見抜いて、吸収すべきところは取り入れ、先ほど申し上げた、自分の中の種を育てる肥やしにする、そして自分自身の考えを練り上げて、自らの人生に生かしていく、そういう、前向きに学ぶ積極性をこれからも持ち続けてほしい、ということです。

さまざまな課題を解決して、これからの世界に豊かさや幸せをもたらしていくには、新たな可能性を拓いていくには、皆さんの世代こそが、中心にならなければなりません。確かに、一人ひとりにできることの範囲は知れているかもしれませんが、しかし、一人ひとりが多様な場で多様な形で、みずからアクションを起こさなければ、何ごとも始まりません。

やがて老兵は去るのみ、これからは若い諸君の発想と、構想力、行動力こそが、求められています。諸君の健闘を祈っています。皆さんには、可能性を拓く、それだけの力が、この学園生活で身につけているはずですよ。

最後に、今一度、卒業、修了おめでとうを申し上げて、学長告辞といたします。

平成 25 年 3 月 20 日

学習院大学長 福井憲彦